群教セ	F08 － 01
	平 14.210 集

学級の教育力を育てるための人間関係づくりの工夫

――ソーシャルスキルトレーニングと構成的グループエンカウンターによる個と集団の育成――

特別研修員　　清水　さとみ　（倉渕村立東小学校）
共同研究者　　伊藤　亜矢子　（お茶の水女子大学）

《研究の概要》

本研究は、ソーシャルスキルトレーニングにより個が人間関係づくりの基本的なルールを身に付け、そのルールを集団の中でいかすことで、ふれあいのある人間関係をつくり、学級の教育力を育てることを目指したものである。その結果、個の対人関係能力が成長するとともに、学級は、話し合いや協力といった関係が成立する集団へと変化し、個と集団がともに成長し集団として機能することができる学級へと変化していった。
【キーワード：生徒指導　教育相談　学級風土　ソーシャルスキル　構成的グループエンカウンター　】

Ⅰ　主題設定の理由

子供は、その成長の過程において集団に所属することで、人とのかかわり方を始めとするさまざまな社会性を身に付けていく。身に付けた社会性を生かしながら子供の集団は、話し合いや協力、支えあいといった関係が成立する集団へと成長し、個と集団が相互に働き合えるものとなっていく。しかし、子供たちを取りまく社会環境が大きく変化した現代、子供たちは子供たちだけでこうした集団を形成することが困難になってきている。ましてや、学級という意図的な集団ではなおさらのように感じる。

児童は学校においては学級という集団で生活している。発達の途中である児童にとって、一日の大半を過ごす学級集団は人間関係をとおして自己の確立をして行くための大切な場となるはずである。しかし、現実に学級集団を見てみると、心無い言葉が飛び交い、無視や仲間外し、嫌がらせが後をたたないなど、学級が望ましい集団として機能していないことが多い。

そこで、ソーシャルスキルトレーニングやソーシャルスキルトレーニングを取り入れた構成的グループエンカウンターの実践を学級経営に取り入れることは、時と場所に応じた自己表現の仕方を身に付け、よりよい人間関係をつくり、学級生活に満足感を持たせ、学級の教育力を育てるために効果的であると考え、本主題を設定した。

Ⅱ　研究のねらい

基本的な対人関係のルールを身に付け、時と場所に応じた自己表現を可能にすることで、ふれあいのある人間関係をつくり、学級の教育力を育てることを目指す。

Ⅲ　研究の見通し

１　学習活動の中においてソーシャルスキルトレーニングを実施することで、児童は基本的な

対人関係のマナーを身に付け、時と場所に応じた自己表現が可能になるであろう。

2　さらに、構成的グループエンカウンターによりふれあいのある人間関係をつくることで、学級の教育力を育てることができるであろう。

Ⅳ 研究の内容および方法

1 研究の内容

（1） 教育力のある学級とは

本研究において育てたい教育力のある学級とは、以下のような集団と考える。

個が学級集団の中で対人関係を始めとする社会性を学ぶことができ、その学びを学級集団の中でいかすことができる。個の対人関係能力が成長することで学級の社会性がさらに高まり、再び個がその学級から社会性を学ぶ、それがスパイラルに繰り返されながら、個と集団がともに成長し集団として機能することができる学級と考える。

また、教育力の高まっている学級集団の具体的な姿は、以下のように考える。

・対人関係のルールを受け入れる共感的な人間関係が存在する。
・自然な自己開示が可能で、話し合い、協力、認め合いができる。
・児童一人ひとりが学級に対して満足感を持ち、積極的に学級へ関与しようとする気持ちになる。

（2） ソーシャルスキルトレーニングとソーシャルスキルを取り入れた構成的グループエンカウンター

学級の教育力を育てるためには、まず、基本的な対人関係のルールを身に付け、時と場所に応じた自己表現を可能にし、安心のできる人間関係をつくることから始まると考える。その上で、互いを認め合うグループ体験をすることが効果的であると考える。

そこで、基本的な対人関係のルールを身に付け、時と場所に応じた自己表現を可能にし、安心のできる人間関係づくりの基盤を作ることを目指して、ソーシャルスキルトレーニング(以下 SST と記す)を実施する。SST を実施し、基本的な対人関係のルールを身に付け、相手を意識したかかわりや配慮への意識を十分高めた上で、SST を取り入れた構成的グループエンカウンター（以下 SGE と記す）を実施する。個が、SST で身につけた社会的スキルを、対人関係をとおして学ぶ場として SGE を行い、自然な自己開示や自他理解、共感的な人間関係づくりを促進する。

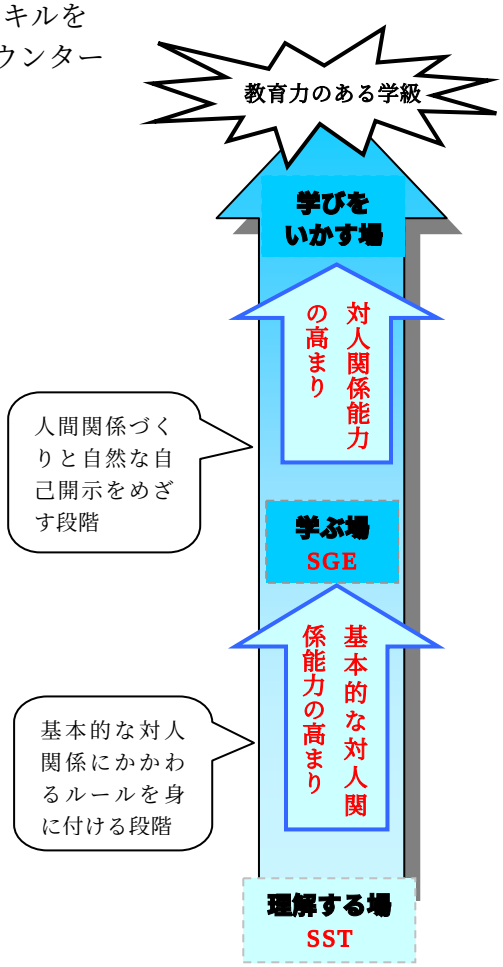


図 1 教育力のある学級づくりのプログラムでの SST と SGE との関係

2 研究の方法

（1）研究の対象　　小学校 6 年生（男子７名　女子１２名　計１９名）

（2）研究の実施方法

〇実態の客観的な把握、課題の明確化のための事前調査を実施する。
ソーシャルスキル尺度、学級風土質問紙(以下 CCI と記す)、配慮した児童の観察

〇基本的な対人関係のルールを身に付けるために、児童および学級の実態に即した SST、および SST を取り入れた SGE を実施する。

〇児童の実態に合わせ、行事や学習活動が効果的に展開できるような SST や SGE を実施し、教育活動全体で、本研究が展開できるようにする。

（3）計画

①実態の把握・評価

ソーシャルスキル尺度　学級風土質問紙（CCI）　学級および配慮した児童の観察

②SST の展開

本研究においては SST を以下の 3 つのステップで実施する。実践全体の中で位置付けられる「理解する場」としての SST の実践ひとつひとつをこのステップでスパイラルに展開していく。

表1　SST 実施での 3 つのステップ

ステップ	実践の場	（例）元気の出る聞き方
理解する 基本的な対人関係のルールを理解する。	学級指導	「元気の出る聞き方」基本の 3 つ、達人の 3 つの話を聞く。
学ぶ 理解したスキルを体験する。	学級指導 各教科等	グループで元気の出る聞き方と相反する聞き方を体験する。
学びをいかす 児童一人ひとりがめあてをもつ。 めあてに向かって実践する。	各教科等 行事 日常生活	児童一人ひとりがめあてをもつ。 各教科での問題解決での話し合いの場、発表会などの場、道徳、日常生活で実践する。

③SST を取り入れた SGE

個が、SST で身に付けた社会的スキルを、対人関係をとおして学ぶ場として SGE を実施する。以下の流れで行い、エクササイズの中に意図的に SST を導入する。

表2　SGE に取り入れる SST の例

SGE の流れ	取り入れるソーシャルスキルトレーニング （例）がんばったあなたへ
①　インストラクション	
②　ウォーミングアップ	
③　エクササイズ	「元気の出る聞き方」 「あたたかい言葉かけ」
④　シェアリング	「元気の出る聞き方」

④ 教育力のある学級づくりのプログラムのサイクル

本研究全体の中で、SST は「理解する場」、SGE は「学ぶ場」と位置付けたが、SST、SGE 自体が学級の実態、理解する場、学ぶ場、学びをいかす場、評価というサイクルからなる。このサイクルが繰り返されながら、SST から SGE へ展開していく。この過程を経て、個の対人関係能力は高まり、ふれあいのある人間関係ができ、教育力のある学級へ集団が成長していくと考える。

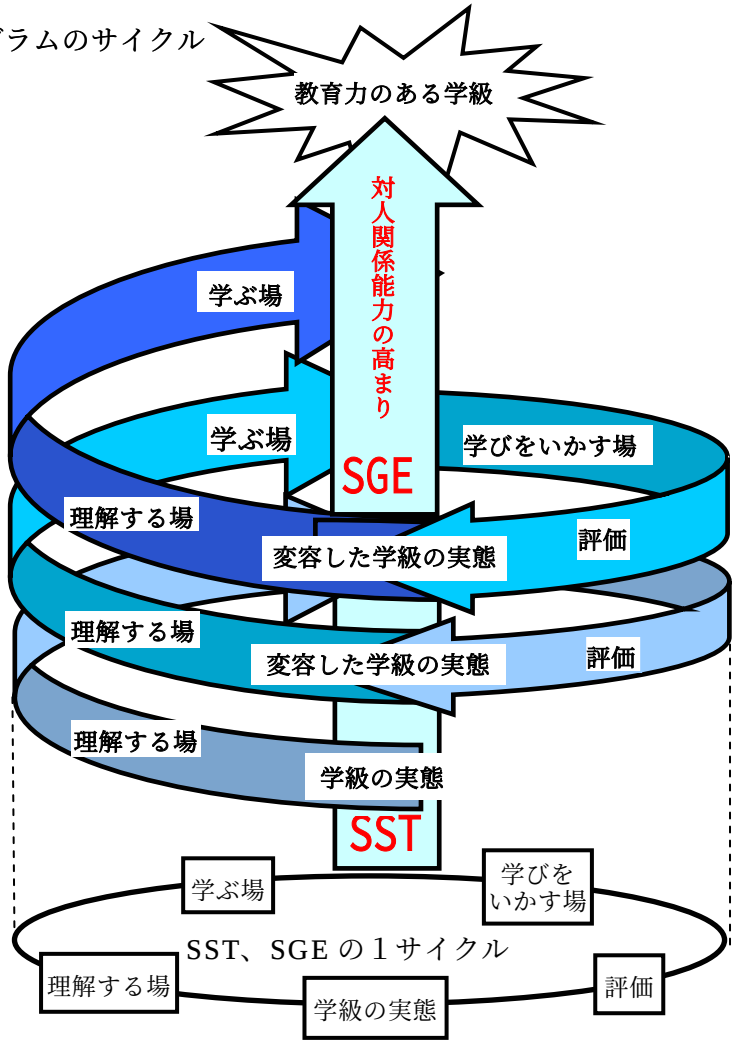


図2　教育力のある学級づくりのプログラムのサイクル

⑤実施計画

		SGE	SST	日常活動
6月～7月	基本的な対人関係にかかわるルールを身に付ける段階		元気の出る聞き方 **国語** 「わたしたちをとりまく社会問題」 **算数** 問題解決の過程での意見発表等 あたたかい言葉かけ **体育** ゲームでの応援の仕方 器械体操での相互評価	**帰りの会** 『マインドタイム』自己理解（今日の感謝）として 『アウチ』 帰りのあいさつの後で
9月 10月 11月	人間関係づくりと自然な自己開示をめざす段階	**運動会（10/6）** 事前『私のちかい』 自他理解 事後『がんばったあなたへ』 自己理解、自己受容 **人権作文発表会(11/16)** 『何がいじめなの？』 他者理解 人権学習の導入 **題材名　言葉のおくりもの** 『言葉のおくりもの』 信頼体験 人権学習のまとめ	トラブルの解決策を考える **学級活動**	

『　　』は SGE のエクササイズ　＿＿　は SST のトレーニング

Ⅴ　実践の概要

1　実態の把握

（１）ソーシャルスキル尺度からわかる学級の実態

配慮のスキル　56.8(平均 55～63)　　かかわりのスキル　34.2(平均 33～40)

対人関係を営む上でのスキル(配慮のスキル)は平均的な範囲には入っているものの、やや低い。友だちと能動的にかかわるのに必要なスキル(かかわりのスキル)も平均的な範囲に入っているものの、やや低い。

（３） CCI からわかる学級の実態

客観的に実態を把握するために、本研究では学級風土質問紙(伊藤・松井，2001　抜粋)を実施した。その結果の分析と解釈を伊藤が行い、それらより学級の実態と人数を検討し本研究のプログラムを組んだ。伊藤が解釈した学級の実態と支援ニーズは以下のとおりである。

やるべきことはできる規律正しい学級風土ではある。女子はまじめに学級活動に取り組む風土を感じているが、「クラスがばらばらになる雰囲気がある」「他と一緒にならないグループがある」と感じている児童があり、女子は、男子に比べて開放的ではなく、全体として自己開示が低い。女子への丁寧な配慮と学級全体の活力を増すようなプログラムが適切と思われた。

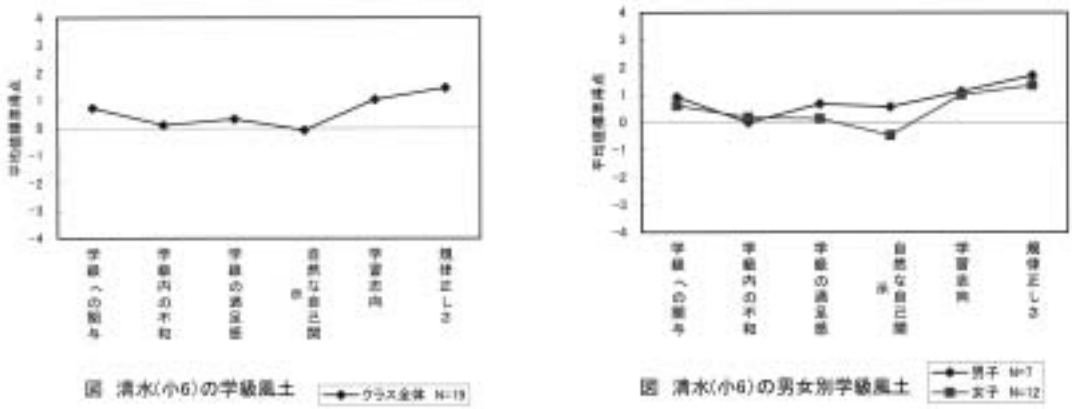


図3　学級風土質問紙による学級の実態 (平成14 年 5 月実施)

（４） 学級の観察や CCI からわかる児童の実態

児童がお互いに、思ったことを相手の気持ちにかまわず強い口調で言ったり、厳しい口調で非難したりする場面が多く感じられた。また、任意にグループを組むときなどは、仲のよい子どうしが、周囲の友だちに配慮することなく組み、満足そうに騒いでいるという様子も見られる。女子を中心に、相手の気持ちを考えないグループがある一方で、何も言えずにいる児童も少なくない。

男女とも疎外感を訴える児童がいる。

CCI の回答には、「この学級は、心から楽しめる」「クラスのみんなはこのクラスを気に入っている」「この学級は、個人的な問題を安心して話せる」「このクラスでは、自分たちの気持ちを気軽に言い合える」とは、あまり思わない、または、思わないと答えている児童が多い。

2 SST、SGE の実践

『　　』は SGE のエクササイズ　　は SST のトレーニング

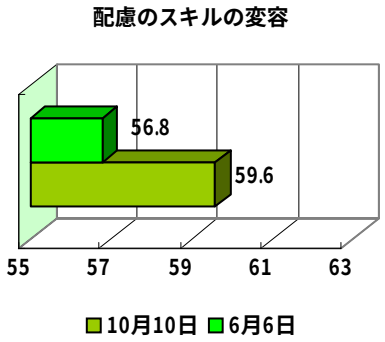
		SST、SGE のエクササイズ名 ねらい、内容等	理解する場 学びの場	学びをいかす場 観察の視点	児童の反応・変容 評　価
6月～7月	基本的な対人関係にかかわるルールを身に付ける段階	**元気の出る聞き方** (ねらい)人の話に注意深く耳を傾ける大切さに気づき、聞くという行為を意識的に行うスキルを身に付ける。 獲得したいスキル 「元気の出る聞き方」基本の３つ ・体を向ける ・話す人を見る ・あいづちをうつ 「元気の出る聞き方」達人の３つ ・質問をする ・最後まで聞く ・くりかえす 自分のめあてをもつ	**国語** 「わたしたちをとりまく社会問題」 意見発表、意見交換 **算数** 「問題解決の手順」 問題解決の過程での話し合い、意見発表	道徳や各教科、特別活動における意見交換や日常活動での場	**算数**（発言より） ・友だちがよく聞いてくれるので、うれしかった。 ・問題が最後まで解けていなくても意見を認めてもらったと思った。 （観察より） ・他の教科や学級活動での話し合いでいかしている児童の姿が見られた。
		あたたかい言葉かけ （ねらい）自分の発する言葉が、相手にどのような影響を与えるかに気づき、優しい言葉かけが状況に応じてつかえるようになる。 ・言葉かけには 2 種類あることを知らせる。 ・相互評価の場面での具体的な言葉かけをあげ、どんな影響があるかを考える。 ・あたたかい言葉かけと冷たい言葉かけの両方で相互評価を実際にやってみる。 ・自分のめあてをもつ。	**体育** ゲームでの応援の仕方 器械体操での相互評価	体育 ゲームでの応援での場、器械体操での相互評価の場、日常活動での場	**体育** （発言より） ・あたたかい言葉でアドバイスされると、がんばろうという気になる。 （観察より） ・厳しい口調で非難することが少なくなってきた。
9月 10月	人間関係づくりと自然な自己開示をめざす段階	**『私のちかい』**自他理解 （ねらい）運動会への意欲を「目標」として意識し、紹介しあうことでさらに考えを深めたり、友だちのよさに気づいたりする。 ・運動会への抱負を考え、マジックでカードに記入する。 ・自由に歩いて、出会った人と紹介し合う。 ・気づいたこと感じたことを言う。 ・振り返りカードを記入する。 **『がんばったあなたへ』** 自己理解、自己受容 (ねらい)運動会をとおして自分自身の成長に気づき、自分や友だちを肯定的に評価することによりクラスの団結を強め、心を開くことのできる集団をつくる。 ・友だちのがんばったところなどを見つけ、伝える。 ・自分を振り返り、がんばったことなどを伝える。 ・ワークシートに気づいたことや感じたことを記入する。 ・「自分への手紙」を書き、お互いを認め合う気持ちで読み合う。	**運動会**（10/6）の事前、事後学習として実施 **事前**(9/17 実施) **事後**(10/9 実施)	運動会に向けての練習 係活動での協力 児童会本部役員改選、後期委員会編成、学級委員選出での立候補の様子や取り組みへの意欲	（観察より） ・組み立て表現の練習では、互いにあたたかい言葉かけをしている場面が見られた。 (ワークシートより) ・伝え合う時に、元気の出る聞き方をしないでそっぽを向かれたりすると、聞いてないって感じがしていやだなって思った。 (発言より) ・自分もとてもがんばったと思ったけれど、それを友だちがみていてくれたことは、うれしかった。 ・友だちもこんなにがんばったんだと思った。

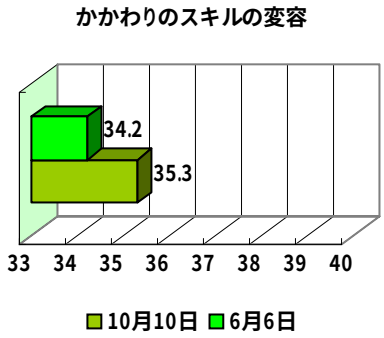
11月	人間関係づくりと自然な自己開示をめざす段階	**トラブルの解決策を考える** （ねらい）問題を解決し、よりよい人間関係を築くために、解決策をたくさん考えることに焦点をあて、解決の手順を身に付ける。 獲得したいスキル ① 解決すべき問題を明確化する。 ② 解決策をできるだけたくさん考える。 ③ 結果を予想し、解決策を決める。 ④ 手順を決めて実行する。 ⑤ 結果を確かめる。 ⑥ 生活の中でのめあてを考える。	**学級活動** (10/23 実施)	日常活動	（ワークシート） ・解決策を実行する時、勇気をだしてきちんとやりたい。 ・ゆっくりでいいから、成果を確かめるまでする。 ・自分をよく振り返って、実行する時に勇気をもって感情をコントロールする。 （観察より） ・教室そうじで仕事を分担する時に話がうまくまとまらずに言い争いになった。児童の一人が解決策をみんなで考えてみようという提案をし、その後、落ち着いて話し合う姿が見られた。
		『何がいじめなの？』他者理解 （ねらい）自分のものの考え方や価値観を見直し、自己を知る。また、価値観が人によって違うことを知り、相手の立場に立ったものの考え方ができるようにする。 ・ワークシートにあるいじめについて、いじめの度合いを考える。 ・班の人の度合いを表にまとめ、班で話し合って、班の度合いを決める。 ・グループでの結果や話し合いの様子を発表する。 ・話し合いを通して自分を振り返り、ワークシートに自分の気持ちを書き、活動の前と後で変わったことや気づいたことを班で話し合う。	**人権作文発表会** (11/16)へ向けての人権学習の導入、事前学習として実施	各教科、道徳、特別活動、総合的な学習の時間における意見交換、学習発表、日常活動での場	(ワークシートより) ・自分が思ったことと相手が思っていたことがぜんぜん違った。 ・最初はあまり気にしないで書いたけど、友だちの意見を聞いて、こういうのか、と思ってきました。 (人権作文より) ・自分が言ったことに、思っていた以上に友達は傷ついたと思う。 ・もっと相手の気持ちを考えたい。
		『言葉のおくりもの』信頼体験 （ねらい）お互いに助け合い、信頼し合って、友情を深め、広めていこうとする心情を育てる。 ・道徳の資料『言葉のおくりもの』について学習する。 ・班の人へのメーセージカードにまとめる。 ・それぞれのメッセージを伝え、カードを贈る。 ・振り返り用紙を書く。 ・お互いに自分の感じたことや気づいたことを班で伝え合う。	**道徳** （11/7 実施） 題材名「言葉のおくりもの」 人権学習のまとめとして実施	各教科、道徳、特別活動、総合的な学習の時間における意見交換、学習発表、日常活動での場	(ワークシートより) ・これからは、友だちのいい所をたくさん見つけてあげたい。 (観察より) ・厳しい口調で非難することが減り、相手の話をじっくり聞いたり共感したりする姿が見られるようになった。

Ⅵ 研究の結果

1 学級の変容

（１）ソーシャルスキル尺度からわかる学級の変容

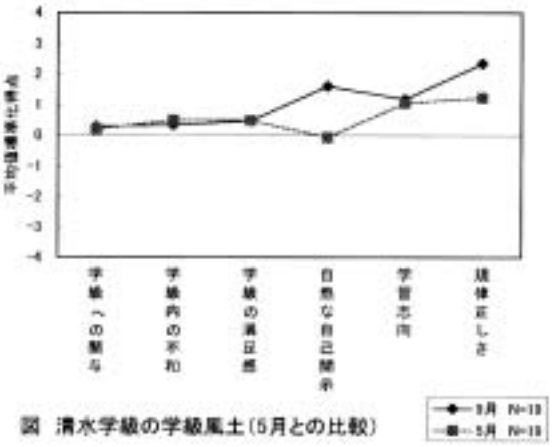


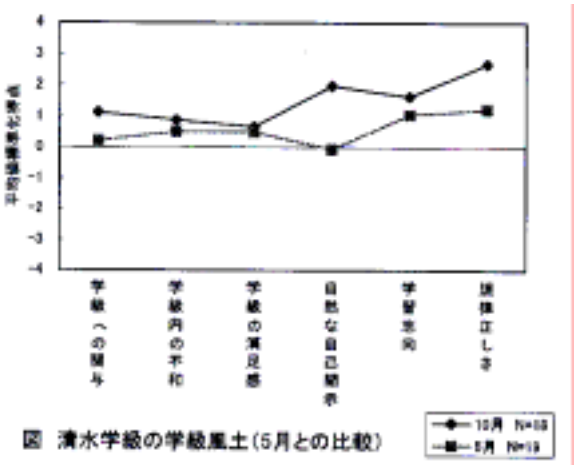


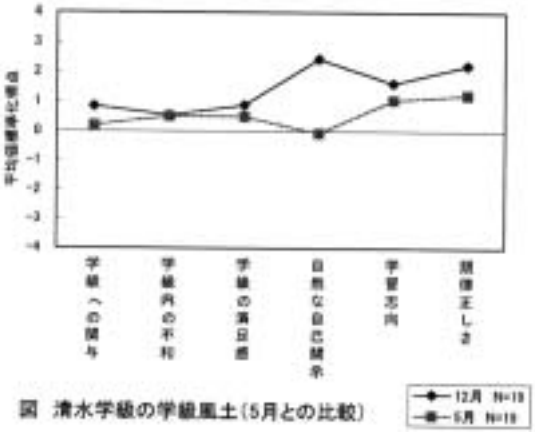
注：配慮のスキル（平均 55～63）かかわりのスキル（平均 33～40）

図4 ソーシャルスキル尺度の変容

（２）CCI からわかる学級の変容







１２月までの学級の実態の変容と
コンサルテーションの内容

・学級活動・学習への取り組みがよく、規律正しく、自己開示しやすい風土を子ども達は感じている。
・９月に比較して、先生の指示以上にがんばって活動したり、クラスのことを考えたりする風土を子ども達は感じている。
・９月以降、自然な自己開示は一貫して上昇傾向にあり、５月と１２月を比べると、自己開示しやすい風土が大幅に高まっている。

図5 学級風土質問紙による学級の実態の変容（平成14 年 9、10、12 月実施）

（３）学級の観察や CCI からわかる児童の変容

9 月、運動会の組み立て表現での練習の中で、友だちとのかかわり方を気に留めている様子が見られた。運動会後の感想では、「みんなで協力したからできた。」「こんな一言がうれしかった。」という、感想が多くあがった。

また、11 月、「人と人とのつながりをとおして感じたこと」をテーマに書いた人権作文では、行事での協力や日ごろの友だちとのかかわりで、うれしかったかかわり方について書いた児童が多かった。

児童がお互いに、思ったことを相手の気持ちにかまわず強い口調で言ったり、厳しい口調で非難したりする場面がほとんど見られなくなった。また、任意にグループを組むときなどは、仲のよい子どうしが、周囲の友だちに配慮することなく組むことは減少し、周囲の友だちを配慮するようになってきた。何も言えずにいた児童の中には、自分の気持ちを受け止めてくれる友だちが増えたと言っている児童もいる。

CCI の回答の変化を見ていくと、「この学級は、心から楽しめる」「クラスのみんなはこのクラスを気に入っている」「この学級は、個人的な問題を安心して話せる」「このクラスでは、自分たちの気持ちを気軽に言い合える」という質問に対して、ややそう思う、そう思うと回答する児童が増えてきた。

Ⅶ 研究の考察

1 学習活動の中においてソーシャルスキルトレーニングを実施することで、児童は基本的な対人関係のマナーを身に付け、時と場所に応じた自己表現が可能になったか

（１）ソーシャルスキル尺度と CCI の変容から

図 4 は、ソーシャルスキル尺度の変容を表したものである。10 月に実施した学級の尺度の結果では、配慮のスキル、かかわりのスキルともにあがっている。また、図 5 の 9 月実施の CCI によると自然な自己開示が大きく上昇し、女子では、5 月より自由にふざけあえる風土を感じるようになった。以上のことから、児童は基本的な対人関係のマナーを身に付け、時と場所に応じた自己表現が可能になったと考えることができる。

（２）日常の観察から

学級の児童の多くに、友だちとの話し方・聞き方、友だちとのかかわりのもち方に変容が見られた。

学級全体でも、児童が、お互いに厳しい口調で非難する場面が減少してきたと感じられる。児童によっては、自分の話し方や話す内容を振り返る場面も見られた。また、任意にグループを組むときも仲のよい子どうしが、周囲の友だちに配慮することなく組むことは減少し、周囲の友だちを配慮するようになってきた。

以上のように、日常の観察からも児童は基本的な対人関係のマナーを身に付け、時と場所に応じた自己表現が可能になったと考えることができる。

2 さらに、SGE によりふれあいのある人間関係をつくることで、学級の教育力を育てることができたか

（１） CCI の変容から

図 5 に見られるように、9 月、10 月、12 月と SGE の実施にともなって CCI 各項目の得点が全体的に上昇している。特に、自然な自己開示、学級への関与が徐々に上昇している。このことより、児童が学級内において安心して自分を表現できるようになり、学級へ関与しようという気持ちが高まってきたことがうかがえる。

CCI の質問に対する回答を個別に比較しても、SGE の実施にともなって、学級の風土をよ

い方向でとらえる児童が増えた。
　以上のことから、SGE によりふれあいのある人間関係をつくることで、学級の教育力は育ってきたと考えることができる。
（２） 日常の観察から
　SGE 実施後の「最初はあまり気にしないで書いたけど、友だちの意見を聞いて、こういうのか、と思ってきました。」「もっと相手の気持ちを考えたい。」などの児童の感想からもわかるように、相手の立場にたって物事を考えたり、相手の考えを認め尊重したりする姿が多く見られるようになった。したがって、SGE によりふれあいのある人間関係をつくったことで、学級の教育力は育ってきたと考えることができる。

Ⅷ まとめと今後の課題

　本研究において、SST、SGE を実施したことで、対人関係のルールを受け入れる共感的な人間関係ができ、学級は、自然な自己開示が可能で、認め合いができる集団へと変容していった。また、学級への関与への気持ちも強くなり、学級の教育力は育ってきたと考えることができる。
　本研究により、学級という意図的な集団であっても、教師の働きかけにより集団の質は変化していくことを強く感じた。今後も引き続き、基本的な対人関係のルールを身に付け、ふれあいのある人間関係づくりをとおして、学級の教育力を育てる実践を積み上げていきたい。その際には、より一層、計画的に児童の実態に即した実践を行っていく必要があると考える。

＜引用・参考文献＞

・河村茂雄　編著　　グループ体験による学級育成プログラム　図書文化(2001)
・小林正幸　相川充　編著　　ソーシャルスキル教育で子どもが変わる　図書文化(1999)
・国分久子　岡田弘　編集　　エンカウンターで学級が変わる Part2　図書文化(1997)
・河村茂雄　品田笑子　朝日朋子　国分久子編集
　　エンカウンターで学級が変わる Part3　図書文化(1999)
・伊藤亜矢子・松井仁　　学級風土質問紙の作成　教育心理学研究,49,449-457.　(2001)